一　プロローグ

今日の「あなた」を入力してください。

ふん、俺は、いつも俺だ。昨日も、今日も、明日も俺に変わりはない。おっと、訂正だ。一寸先が闇ならば、明日があるかどうかわからない。過去の俺があっても、未来の俺は存在しないかもしれない。でも、いつもの俺って、何者？

まず、お名前は？

「荒野　荒地」

今の気持ちを漢字で表現するとこうなる。どうだ、少し洒落ているだろう。ただし、パソコン入力ならば、ひらがなを漢字に簡単に変換できるが、いざ、自分で名前を書いてみろと言われれば、草かんむりを竹かんむりにしてしまいそうだ。最近、山村では人口減少で、竹の伐採ができずに繁殖して、里山が荒廃しているというから、時代を反映すれば、竹かんむりの方が適しているかもしれないな。

読みがなは？（全角カタカナでお願いします。）

「コウヤ　アレチ」

「あれの　あれち」でも「こうの　こうち」でもいいけれど、同じ音で始まるのは、少し芸がな

さすぎるよな。少しひねったつもりだけど「コウヤ　アレチ」では、逆に、ストレート過ぎるかな。種を蒔いても、育たないか。まさに、今の俺だ。でも、雑草ぐらいは生えるかな。すると、俺は雑草か？

次に、住所は？

「東京都大阪区東本願寺四丁目一番一号　時計台通り　青葉山公園下り　山下公園上り　ルミナリエマンション一〇一号　中州方」

どうだ、日本の大都市、東京、大阪、京都、札幌、横浜、神戸、福岡を網羅しているぞ。将来、狭い日本を出て、広い世界で活躍する、したい俺にとってはふさわしい住所だ。どうせやるなら、大きくいかなくてはつまらないぞ。たった一度の人生だ、パッとやれ。（住所ごときで、そんなに、気合をいれなくてもいいか）

年齢は？

「三十歳」

自分で入力しておきながら、ううーん、微妙な年齢だと思う。二十代のように、失敗しても、「若いからね」と許されることもなく、四十代のように、世間から責任ある地位についているわけでもない。先輩と後輩に挟まれたハンバーガーの具のようだ。それに、肉のハギレを油脂でつなぎ合わせた百円ハンバーガーとして取り扱われるのか、肉が三段重ねになった高級ハンバーガーとしてもてはやされるかは、俺の努力次第だ。具だって、ビーフ百パーセントの肉なのか、申し訳なそうに挟まれて、いつでも押しだされるピクルスなのかによっても、評価が異なる。へたをすれば、口の中には入らず、包み紙にへばりついたまま、ゴミ箱へ捨てられてしまうことだっ

てありうる。さて、俺はどっち？

　性別は？

「男性」

　確かに、生物学上、肉体の見た目は、男性だが、個人的には、男でも、女でも、どちらでもかまわないような気がしている。男も、女も、もっと、世間から解き放たれて、男や女を自由にはじめたり、やめられたりすればいいと思う。男をやめたからといって女になるのではないし、女をやめたからといって男になるのではないはずだ。一人の人間として、生きてみたい。

　しかし、他人との関係性を断ちたいと言うことではない。最近、ニュースで報道されているように、一方的に父親・母親をやめ、子どもの養育の義務を放棄したり、家庭内暴力を起こし、死に至らしめることではない。また、子どもをやめ、自分の両親の命を脅かすことでもない。それは、人間をやめたことになる。「それじゃあ、男も女もやめたら、何になるの」と自分で突っ込むけれど、答えはない。

　職業は？

「会社員」

　会社員という表現ほど、全体を掴んでいるようで、隙間だらけの言葉はない。果たして、この日本に、株式会社や有限会社など、どれくらいの数の会社があるのだろう。そして、どれくらいの数の会社員がいるのだろう。会社員という括りは、あまりにも大きく捉えすぎて、自分を何者なのかは確定できない。

会社だって、旅行業から、建築・土木関係、果てまた、電気やガスなどの公共的性格を持つものまで、種類に分ければ、何万、何十万にもなるだろう。また、会社員にしても、営業から経理まで、様々な職種があるはずだ。見えない自分がいいのか、幽かでもいいから、点の存在を知って欲しいのか、気持ちに微妙な揺れがある。

何、さっき、性別から自由になりたいと、言っていたじゃないかって。職業だって、同じように自由になればいいじゃないかって。そうだな、一緒だよな。だけど、今の気持ちを大事にすると、会社員の表現では、不安なわけだ。俺の心は、虹色・ザ・ディ、虹色・ザ・タイム、虹色・ザ・ミニッツ。瞬間、瞬間で、カメレオンのごとく多彩に変わる。何のこっちゃ。

年収は？

「三百万円」

独身で、しかも、親と一緒に同居していれば、これだけの収入で十分食っていけるだろう。これと言って、趣味もないので、お金を浪費することはない。強いて言えば、パソコンやスマホの機能充実のため、ソフトやハードを整備するのに、特売のチラシを持って、電化製品の量販店やパソコンショップを駆けずり回るぐらいだ。それも、当然、同じ商品ならば、一番価格の安い物を選ぶ。お金は節約して、時間を浪費しているわけだ。まあ、そのお陰で、金は貯まる一方だが。

だからと言って、金を使う宛てもない。俺のところで、お金がわずかだがとどまっているのは、日本経済全体で言えば、経済の活性化を阻害していることになるのだろう。少し。反省。でも、使い道を知らないこの俺には、猫に小判、豚に真珠、飼い犬に自由、サラリーマンに改革心だ。

学歴は？

なんだ、まだあるのか。早く始めて欲しいなあ。質問ばかりで、前に進めないじゃないか。でも

、人生を前に進むためには学歴が大切だからなあ。学歴によって自分の人生が大きく変わるもんな。仕方がないか。

「大学卒・予備校一年在学・留年一年」

　まさに、よくあるパターンの人生を過ごしてきた。世間からいいと言われている大学に入学するため、受験勉強に精を出し、苦節一年の後（予備校時代に通ったラーメン屋で昼飯に食べた中華丼が懐かしい）、見事、希望の大学に合格。だが、入学してみたものの、大学に入学することが目的で、何をしたいかが目的ではなかったために、案の定、授業には出席せず、煙がもうもうで自分の人生の前が見えないパチンコで一日を過ごすか、友人や俺の下宿先で、地産地消の名の下で、仲間同士で金を循環させる麻雀三昧の時間を過ごし、その結果、進級が叶わずに留年。

　さすがに、このまま、ドロップアウトの人生を過ごす気構えも、強い意志もないため、取りあえず、授業にだけは出席する。欠席の際は、一学年下の後輩と無理矢理に親しくなってノートを見せてもらい、最低ラインのＣの連合軍の成績表を片手に、大学の門を出た。まあ、面白いと言えば、面白かった大学生活だったが、もう一度、人生をやり直すならば、別の道を歩んだに違いない。いや、一緒か。

　未婚・既婚ですか？

「未婚」

　これまでの人生で、「これは」という人との遭遇は、何度かあったものの、今ひとつ、結婚という形式に踏み切れず、三十代を迎えることとなった。現在、つきあっている女はいない。結婚だって、してしまえばそれはそれで、なんとかやっていけるのだろうが、大学生活と同様で、あえてする必然性が自分には感じられない。たまに、飲み会をすると同級生からは「自分の子供は可愛いぞ。お前も、早く、結婚しろ」、と急かされるが、子供を作るために結婚するのであ

れば、そんな面倒くさいことはやめて、どこかの恵まれない子どもを預かり育てればいいじゃないか。その方が、社会の役に立つ。

　どうせ、血縁なんて、幻想以外のものでもないか。同じように赤い血が流れているだけで、青い血や黄色い血が流れているわけではない。血縁の証拠なんて無きに等しい。親子だと、顔や体格が似てるじゃないか、って。でも、所詮、目や鼻や口など、同じ器官や数しかないのだから、その配置のパターンにも限りがあるから、同じような顔になるだろう。

　特に、最近は、芸能人をはじめ、普通の人でも、全体にしろ部分にしろ誰かを手本にして整形をやっているから、同じ顔になるんじゃないか。顔が似ているなんて、家族の根拠にはなりはしない。つまり、互いが、勝手に家族だと思い込んでいるにすぎない。一方が、家族だと思わなければ、家族は崩壊する。今は、ただ、そう思い込んでいる方が便利だから、そうしているだけだ。

　それに、「自分の子供は可愛いぞ」という言葉の裏には、妻との間には、もう愛情はないけれど、家族を維持していくために、子どもをかすがい、接着剤、運命の縛り糸として頼っているだけではないか。だからこそ、子どもが成長すると、熟年離婚の道を辿るのだろう。

　家族は何人ですか？

「一人」にしておこう。もちろん、「しておこう」という入力項目はない。

　本当は、父親と母親、俺の三人の家族だが、父親と母親は一階で生活し、俺は二階で寝起きしている。朝は、新聞配達から新聞を受けとると同時に出勤するし、夜は、近所の人に自分の姿を見られないように、暗闇のカーテンが引かれるまで家に戻ってこない。無理やり、職場や、前の職場、同期の友人、大学の友人などと、交流の促進と銘打ち、飲み会友達を渡り歩いているため、家で食事を摂る機会はめったにない。時折、孤独から逃れられない砂漠のような喉を潤すため、大トラとチドリの中間の歩き方で、リビングルームに忍び込むことがある。俺のために残しておいてくれたテーブルの上の冷めた夕食を見ると、ありがたい思いとほっておいてくれという気分が卵ご飯の黄身と白身の関係のように、混じりそうで混じらない。

　だが、そんな気持ちも、コップ一杯の水が、俺を日常へと流してしまう。流れた行き先は、明日の飲み会のこと。おっと、財布の中に、千円札が一枚しかないぞ。いくら折りたたんだところで

、一枚は一枚。二枚や三枚になるわけではない。家族も同じだ。こんな生活では、両親との会話がないのは当たり前だ。一人生活者と言っても、過言ではない。冷たいだって？六十過ぎの退役将校と三十のおっさん予備軍の間で交わされる言葉なんて、俺だけでなく、父親の辞書にも載っていないはずだ。でも、かあちゃん、いつも夕食の準備をありがとう！

　メールアドレスは？

「四八八四・一一九二@ＮＩＮＧＥＮ・ＤＡＫＡＲＡ・ＮＥ」

「しあわせ・いいくに・にんげん・だから・ね」

　本当に、願い事って適うのかな。最後は、自分の幸せじゃなくて、他人の幸せを願うようなサンタクロースになるしかないかな。半径一メートルの小さな幸せが、世界の隅々まで広がりますように。合掌。

　連絡先は？

「〇一一二三四五一六七八九」

　数字って、無限大だよな。俺って、有限だよね。だから、数字に憧れるんだ。心だけでも、翼が生えて、颯爽と、時空を超えて飛び回りたい。

　今後、関連する内容について、メールを配信してよろしいですか？

「はい、の欄をチェック」

　いいよ、いいよ。何でも送ってくれ。関連する内容って、何かわからないけれど、ここで、「いいえ」と答えると、全てが終わってしまいそうな気がする。それに、インターネットは、世界中に繋がっているから、数字のように、自分も無限大なれる幽かな期待がある。本当は、巨大な蜂の巣穴のひとつに閉じこもって、その穴もいつ蓋が閉まるかわからないのだけれど。

　それでは、ごゆっくりと会話をお楽しみください。